

第二百十三話 プロパガンダ、初（うぶ）過ぎた日本！

「戦争プロパガンダ 10 の法則」なる書籍（アンヌ・モレリ著 永田千奈訳 草思社）がある。大東亜戦争を語る時、何故欧米諸国や支那があれほど執拗に東条首相を悪の権化、ヒットラーに準えて非難したのか、日本の残虐性を殊更に誇張し、自らの悪逆には口を噤んだのか等が本書を読んで、氷解した思いがした。自らの正当性を主張するのは双方共にではあっても、彼等のやり口は農耕民族の我等には理解を超える。日本はプロパガンダに疎い、無関心すぎる。本書の「10 の法則」を紹介して諸賢の参考に供したい。

1 本書の概要

英国の貴族アーサー・ポンソンビー卿（1871～1946）が、1928年ロンドンで出版した古典的名著「戦時の嘘」の指摘を踏まえて、戦争プロパガンダの基本的なメカニズムを検証したものである。著者は、ブリュッセル自由大学の歴史批評学教授 アンヌ・モレリである。ポンソンビー卿は、第一次大戦中のプロパガンダについて、分析・考察して、第一大戦中英国政府が、如何に嘘をついたかを暴いたのである。ポンソンビーは戦争プロパガンダについて、10 の法則に集約できるとしている。

その10の法則を踏まえ、著者は、両次世界大戦から冷戦、東欧でも中東でも、現在にいたるあらゆる紛争において流布され世論を操る、巧妙かつ効果的ともいえるプロパガンダを駆使したかを実証しようとした。シニカル過ぎるとも思えるが、・・

2 戦争プロパガンダ 10 の法則

第一：「我々は戦争をしたくない。」

戦争をはじめる直前、または宣戦布告のその時に、必ずと言っていいほど、厳かに先ずこういう。我々は戦争を望んでいる訳ではない」（20p）

第二：「しかし、敵側が一方向的に戦争を望んだ。」

戦争を終わらせるために戦争をしなければならないという矛盾に目をつぶり、今度こそ「最後の最後」だと主張する。（30p）

第三：「敵の指導者は悪魔のような人間だ。」

相手国の指導者に敵対心を集中させることが戦略の要になる。敵に一つの「顔」を与え、その醜さを強調するのだ。（54p）

第四：「我々は領土や覇権のためでなく、偉大な使命のために戦う。」

第五：「我々も誤って犠牲を出すことがある。だが、敵はわざと残虐行為におよんでいる」敵側の残虐さが強調される。

第六：「敵は卑劣な兵器や戦略を用いている。」

第七：「我々の受けた被害は小さく、敵に与えた被害は甚大」

第八：「芸術家や知識人も正義の戦いを支持している。」

第九：「我々の大義は神聖なものである。」

第十：「この正義に疑問を投げかける者は裏切り者である。」

3 若干の私見

- (1) 欧米諸国や血で血を争う数千年の歴史を持つ支那は、正にこの「10 の法則」を実践している。戦後の各紛争においても然りである。日本は幼過ぎた？
- (2) 歴史が勝者の歴史である限りにおいては、戦時中のプロパガンダがその歴史に色濃く反映されてしまう。それは現代の日本を見れば明らかである。
- (3) 本メモランダム 11 話「米世論を劇的に変えた宋美齡」でも述べた如く、プロパガンダの功罪は別にして、その影響力は絶大である。日本が現代に至るも、国際情報戦・宣伝戦・プロパガンダ戦に弱いのは、その歴史の由縁なのだろう。だとしても、現状のままでもいい筈はなからう。

（第二百十三話 了）